

3. 11あの日から、～身近に起きた出来事～

佐藤 康浩（仙台市水道局 給水部長）（当時所属：管路整備課）

○あの日我が家

あの日、私は休暇を取り、長女の中学校卒業式に出席した。帰宅後に遅めの昼食をとり、妻とともに子供たちの帰りを待っていた。長女が帰ってきた。やや目が赤い。続いて、小学4年生の息子が帰ってきた。ランドセルを放り投げ、おやつを食べ始める。普段の我が家のありふれた風景。

突然、地鳴りとともに大きな揺れが始まった。即座に「ギュイン ギュイン ギュイン」という携帯電話の緊急地震速報が鳴る。揺れの激しさに、4人でテーブルの下に身を隠す。揺れが弱くなり始めたと思った瞬間、揺れは更に烈しさを増し家がバキバキと軋み、テレビが飛び、備え付け収納の開き扉が倒壊し、食器棚の皿が扉ガラスを突き破り、次々に飛び出し割れる。地響きと破壊音が入り混じる恐怖に息子が泣き出す。「大丈夫、大丈夫」と声を掛け、勇気づけるが、本当に大丈夫だろうか？全く自信がない。このまま家が潰れるのではないかと。激しい揺れはまだ、続いている。

長い揺れが終わり、家族の安全を確認しあい、皆な無事だったことにホッとす。早く水道局に参集し、復旧活動を始めたいと心が焦った。家中に散乱するガレキを掻き分けながら、玄関の外に出たが、周辺地盤が滑動したため、歩道のアスファルトが盛り上がり、車庫からは車が出せない。止むを得ず、自転車に乗り、家を出た。勤務する大野田庁舎までは15Km、交通障害も予想され、移動時間を考え、自宅から6Km離れた国見庁舎へ向かうことに決め、北環状線の坂道を上り続けた。途中、対向車に水道局の公用車を発見し、急いで自転車を歩道に止め置き、強引に停車させ、乗り込んだ。管路整備課の若手職員が運転しており、大野田庁舎に戻る途中だった。私は、車載無線で本部に連絡し指示を仰ぎ、復旧活動に加わった。

○仮設校舎の子供たち

息子たちが通う小学校周辺では地滑りが発生し、道路が割れ、家屋が潰れるなどの被害となった。小学校は立入禁止となり休校、1か月後に近くの中学校の空き教室や武道館を間借りし、小学校が再開された。息子の学年を含む3学年6クラスは、武道館をダンボールで区切った教室で授業が始まり、再開されて10日足らずで授業参観が行われた。子供たちが学ぶ姿を早く見てほしいという先生方の温かい思いが伝わってくる。ダンボール一枚の壁を隔て、隣の教室からの声が入り混じってくるが、子供たちは授業に集中、一生懸命。先生方も一生懸命。保護者は笑顔と涙の授業参観だった。

東日本大震災の発生から2年が過ぎ、息子たち62名の児童は、仮校舎となっている中学校の体育館で卒業式を迎えた。大震災は、児童一人一人に、あまりにも辛く悲しい経験を強いることとなったが、子供たちには、大震災で否応なく培われた逞しさと優しさを携え、成長して行くことを願った。

○志津川のおばあちゃん

南三陸町志津川には母の実家があり、私の祖母と叔父叔母が住んでいた。私たちが帰るときには、おばあちゃんは、いつも、高台にある家の庭から車が見えなくなるまで手を振り見送ってくれた。

3月11日、大津波の襲来に、祖母と叔父叔母は、より高台へと逃げ延び、志津川から5Kmほど山あいにある小学校の体育館が一次避難所となった。4月初旬、私たち家族は手に入る精一杯の食材や衣類などをもち、その避難所を訪問した。体育館は避難者であふれ、割り当てスペースは狭く、床に敷いた毛布からは冷たさが直接伝わってくる。祖母は、窮屈な避難生活に体中の節々が痛いといっていたが、私たちが帰るときには体育館の外に出て、車が見えなくなるまで見送ってくれた。

数日後、小学校の始業に合わせ避難所が変更された。一次避難所から更に10Kmほど内陸にある廃校になっている小学校が二次避難所となった。その避難所を訪問した時には、祖母は歩くことができなくなり、車椅子での移動を強いられていた。避難所での不自由な生活に、追い打ちをかけるように体の自由も利かなくなり、私たちが帰るときは、叔父が車椅子を押し教室から見送ってくれた。

8月中旬になり、ようやく志津川に仮設住宅が完成した。六畳間と四畳半に台所がつく狭い仮設住宅では、車椅子での移動はできず、祖母は座ったままの生活になってしまった。玄関先での見送りもできなくなり、もどかしそうな、寂しそうな顔で手を振ってくれていた。それが、私の記憶に残るおばあちゃんの最後の姿となった。

まもなく、祖母は、肺炎から多臓器不全となり、9月25日に亡くなった。高齢の体には、長期間の避難生活や度重なる移動は、負担が大き過ぎたのだろう。葬儀場に向かう杉並木から見上げると、津波で遡上した衣類やビニールが吊下がったまま。墓地からは、志津川の町並みと海が一望できる。何も無くなった灰色の町に紺碧の海が接している。何事も無かったように穏やかで、美しい碧い海の向こうには、切れ目なく青い空が続いていた。